

はいはずして、却てからすなきがあしきなどいふて、我を不祥の物として忌嫌ふ、是ほど心得ぬ事はなしと云鷺の云、汝人に凶を告るとて、恩に著するも、人の鳥なきがあしきとていやがるも、共に非也、然れ共其徳なく其實なくして、人を正し、人の非を告る時は、聞く者信せず、却て我をそしれりとして、忌嫌ふは人の情也、汝の常をみるに、鼠をとらんとて、人家の屋根をむしり、畑に蒔付植付たる物をつゝ、きあらし、人の秘藏する樹木の菓をぬすみ何なり共人の乾しておく物を、遠慮もなくとり喰て、人にくまるゝ事のみ也、其なく聲さへ、餘鳥よりもやかましく、人のいやがるは尤也、汝の人に凶を告るといふも、其徳あり其實有て告るにはあらず、雨氣に感じて青蛙の鳴がごとし、汝の啼故に凶事の來るにもあらず、只汝不祥の氣ある故に、人家に不祥の事あれば、汝必ず其氣に感じて其所へ集り啼のみ也、是同聲相應じ、同氣相求るものなり、何ぞ是を以て人に恩有とせんや、○下略

〔關の秋風〕鳥はむくつけき鳥なれど、孝つくす心ばへあはれなり、元日のあけぼの、東の方まらみ行くほど、黒き林の中より、聲のみ聞えて飛び行くもをかじ、星みえぬばかり、月さえたる夜晝の心地ちして、梢に打ちさはりて鳴きたる又をかじ、夏の夕つかた、日もいりはて、涼しき頃、ねぐらとひおくれたるが、二つ三つ飛び行くもをかじ、雪ふり積りて、庭も野山もこといろなきに、獨飛びかふもはえありてをかじ、

〔芭蕉文集〕鳥之賦

一鳥小大有て名を異にす、小を鳥鵲といふ、大を鶡太といふ、此鳥反哺の孝を讃して、鳥中の曾子に比す、或は人家に行人をつげ、天の川に翅をならべて二星の媒となれり、或ひは大年のやどりをまりて春風をさとり、巢をあらたむといへり、雪の曙の聲寒げに、夕に寐所へ行ななど、詩歌の才士も情あるに云なし、繪にもかゝれてかたちを愛す、只貪猶の中にいふ時は、その徳大いなり、